

新曲
大
石

特116
543

~~67
189~~

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



97116
543

此の書院におの義士(2000)等

勤行より山日美有志者より隆典



奉納せられたるに記録す

傳へしことあるに思ふにたし

有某の家は其の志は尊貴なり



中お家の修訂をなすこと公せしむ
津に縁多しめたることごとく

大正甲寅正月

花岳精舎守塔

不老袖誌

大石

是ハ播州赤穂華岳寺の住僧也。
叔も當寺ハ淺野家の御菩提所に
て、義士の木像をも安置道一年ごよ
法會を営みし。又東國への志有よし。
結縁ふりき泉岳寺人も亦らばやと
思日立てし。
和名及通ふかた屋の里

を立出て、乾々のぼる堤原の絶ぬ
きありを跡よつんで、くびり、
と白鷺、此城も、次身よきを、
鐘のなるを、た、難波の草も、
伏見の、足、乃山科の、
け、急い程に、山科の郷に
着て、依此、大石の名跡を、

ばやと思ひ、
跡あるや、古への、
の流、
おとあ、
な、
給ひ、
そ、

吊らし糸とせよ ニテ 実有難きは事

うふ我も明るる片おのの袖も不縁の人

の為共々善提を吊ひ給りばよく

有難ふ社供へ 保 まこそ安きはるの實

や忠孝ハ三教の基ば人こそ古今歎

ひなき忠臣ぞと後の世迄も祀をれ

給ふ其は跡を拜更に吊りて言ふ

流身ハ相カレい成人そましますぞ ニテ 実御

不審ハ法理今ハ何をうつむべき我を

大石良雄ふるがゆりも深きは僧乃

くふも安ふ来り給へば愛物法中

さんとびん今我を出さる也 上 風さをふ

花よりも我我はまたウク 春の名跡我

いふとかさんと ヤ 辭世ありたる主君の

は跡残るをも 二 共 一 吊ひ 三 踏む 二 再び 一 足
え 下 中 一 さん ト と ト か ト き ト ち ト け ト や ト ち ト り ト よ ト 足 ト ふ ト 多 ト 梨 下

く 早詞 ぶ 一 ぎ 二 や 三 今 四 の 五 里 六 人 七 は 八 正 九 しく

ら 良 雄 の 画 具 の 残 言 々 々 を う り じ ゃ

よ と 上 思 へ ば 狩 も 夜 も ず ぐ ぐ ぐ

ま ね て 夢 を ま た ン と て 一 味 の 跡 を 懇

に 弟 小 法 持 珠 ぬ る ぐ 後 兎 に

角 は 思 日 の ち ろ ろ 身 好 上 に 志 ば 迷 白

の 重 と て も な ー ツ ヨ ン 危 安 の 吊 ち や な

生 死 の 苦 海 を 打 後 更 後 の 世 ま で も

面 と 一 心 助 子 彼 山 乃 の 甚 至 子 終 ぶ

有 難 さ よ 早 成 乃 ー や 朝 夕 ま つ る 木

像 の 真 面 貌 を ま の あ ー り 今 ー 見 る

事 の 嬉 ー さ よ 早 我 も 志 ー き 上 人 に

まねて見えん其為カレと是と雖レ平ニ来
りたる早 謀レ此レ反も孝を忌を嘗み
義士の供養をなく 時ニ大石の神垣
をさも吐簾子造られり 其法因を
謝せん為レ現なぐらも君家の大りの
始末を語申べし 抑地元禄十四年君
初使岩倉の法後を承り 陰ひしに

左法を司る言吉良テ我失和怒ふりく
周役の齟齬を生ぜしめ 妨をなま
な言くな言した怒をおさ言堪忍し言あ言を
満座の中カおて色レに言耻辱を造られ
跡レ残りし言怒を言一刀お言めて切給
ども言遠る者ありて言吉良言の為手に
逃のびぬ其時の言無念言察す言らに

我々余ありしウ 我々事を望しより院
よ覚悟しよりさうは時節を待ちて
は選志をお終せんと誓ひひたりと
がら敷多の家臣の中瓦金の誓を除
うねを大望を遂げんるを誓しと玉碎
金石の人と首肯し只管時を待けり
我々の山科と東居し同志と往復の

謀様の中おも蓋野三平の一念義
路を控ふる又其外親をすて妻あ子と
別を身をうく千辛万苦後の世に
しを引や梓弓矢だけ心をうくさどと
二年余月日へて其三天を戴うぬ敵を
終まをり得て吉良の館に秘入る
頃ハ油走の中をや月さ人四十七士の心を

思す雪の中^ニ宿^ル互^ニありき^ニ中心^ノの道^ヲ秘^シ立^テ様^ニ不^レ
晴^ク小^ノ神^ノたい^ニ乱^レさ^ズ表^ノ門^ヲ重^シ表^ノ門^ニ向^フ
忠^ト義^ノの二^ノ手^ヲ分^ケて山^ト川^ヲ呼^ビあ^ハふ
声^ヲ打^テ破^リ教^ヲを^テ聲^ヲう^チ討^テ入^ルる^期
潮^ノ田^ヲを^テ姑^クめ^テ其^ノ外^ヲを^テ遮^ルる^教の^勇士^ハは
皆[、]ソ^レが^らぬ^手の^内乃^中心^又我^槍
う^レ多^ク也[、]い^はば^上の^面に^一く[。]

思^フ不^レ教^トと^安が^レ一^環なく^守ね^るぬ^が
斗^とど[、]教^トを^テ見^へず^サ然^然と^互と^あき^れ
果^居たり^中心^ノ無^キ人^ノぶ^いせ^めて^教
の^教を^テ獲^テ切^リ果^んと^云け^ば我^ノ制^ス
して^考方^どよ^今う^う時^ハ七^つなり^一陽^ノ
き^ざん^寅の^一天^ハ星^輝く^味方^ノ利^ハ
ある^徴ぞ^とを^テ言^ふ声^ハ花^をあ^がる^所

尋れど時を問ハ声を立て教をほり
と叫ぶより皆をいさみ集りて
子能く見れば難なき事らあれば
今こそをこそせま君の鑑とたちま
首をとる一同よりこび勇つる明方
ふなればそをもち主君の首を前よ
供へんと隊伍乱さず引上るウ和げあや

旗くしき物語つきせぬ世この後とも
神と祭られ我國の浮世をさく心
のいらはにほんどちりぬるを四十
字のおへまう突ことわりや雪氷とくら
めぐみも日乃因心や礎とありて大石の
忠義様とありみん衆く

187
187

著作權
所有

大正三年六月十日印刷
同 六月十四日發行

節付者 中村 信一
大阪市東區平野町貳丁目

著作兼 發行 者 養老 社
兵庫縣播磨國赤穂町

印刷者 檜 常之助
同町 代表者 柴田善太郎
京都市上京區三條通麩屋町北東角

此一曲ハナハナをいふ赤穂ニ大石の神垣
は築き造つてぬしよりのふの古起者
の古きものよ新くぬしをよみ字
あつちかたなりやうをうくハハハ
とらちあわわうへいしくもをこある
さとゆはしつゝあつちかた

大正式と海 浪華 中村知微

終